

監訳のことば

欧米では2000年代初頭頃から医療プロフェッショナルリズムに関する議論が高まりはじめ、その後、急速な広がりをみせてきました。日本でも数年遅れてプロフェッショナルリズムの議論が徐々にはじまり、少しずつ広がりがみられてきています。しかしながら、まだまだ発展途上と言わざるを得ないように思われます。

その理由の1つに、プロフェッショナルリズムの定義がはっきりしないことがあげられるかもしれません。日本での議論は定義にこだわり過ぎていた感があります。プロフェッショナルである、アンプロフェッショナルである、ということは、なんとなく認識できるものの、言葉で定義することは難しいものです。学術的な立場によりさまざまな異なる定義がされていることは、このことを示しています。詳細な定義にこだわるよりも、“医療現場で生じているさまざまな課題に向き合い、医療専門職としてどのように行動すべきか”，このような視点でプロフェッショナルリズムを捉えることの方が、プロフェッショナルリズムの議論には有用に思えます。実際、近年の欧米の論文や教科書では、プロフェッショナルリズムを脅かすような医療状況のなかでどう対応していくか、ということについての議論が多くみられるようになっていきます。

医療専門職、医療をとり巻く近年の日本の社会状況は刻々と変化してきています。超高齢社会における効果的・効率的な医療のあり方、地域医療構想のもとで進められる医療供給体制の改革、急速な発展を遂げつつあるAI技術が適用される近い将来の医療、働き方改革に対する医療現場の対応、医療専門職のワークライフバランスまたはワークライフインテグレーション。われわれ医療専門職は、個々の臨床家としてまた医療専門職集団として、次々と現れてくるこれらの新しい課題に日々向き合わずにはいられません。そのなかで、ときにプロフェッショナルリズムが脅かされる状況に遭遇することもめずらしくはありません。そして、そのような状況のなかで臨床家は心身の健康を損ねることもあります。

この本の原著は2018年に英国で発行されたものであり、近年の医療状況を鑑みたうえでのプロフェッショナルリズムの課題が整理されています。本書は、われわれ臨床家が自身の健康をケアしたうえでプロフェッショナルリズムを維持して患者中心の医療を提供していくためにどうすればよいのか、このような重要な現実的な課題に示唆を与えてくれるでしょう。本書を手にとることで、ときに厳しい医療現場の真っただなかにいる臨床家が、新たな視点を心得、プロフェッショナルリズムを維持して患者さんと向き合えるようになることを願っています。

2020年1月

愛知医科大学医学部
地域総合診療医学寄附講座・医学教育センター

宮田靖志